

2025年12月の総評に代えて

○林 桂○

●さいう●（石川県 20歳）

月光
は
白磁のにおい
身ひとつで彼岸の銀河鉄道めざす

【評】「銀河鉄道の夜」を踏まえながら、自身の美しいイメージを描き出している。「月光／は／白磁のにおい」の繊細な感覚が光る。

●汐見りら●（東京都 25歳）

冷めるまで
レンゲにつくるミニラーメン
わたしと暮らすのはむずかしい

【評】「わたしと暮らすのはむずかしい」のは、誰彼ではなく、自分自身なのだろう。ラーメンの食べ方のひとつをとっても、自分自身との折り合いがなかなかつかないと感じているようだ。

●塩見 侘●（沖縄県 46 歳）

睡眠時無花果症候群

【評】「睡眠時無呼吸症候群」のパロディだが、「無呼吸」を「無花果」に変換する、その意外性と諧謔性に思わず立ち止まられる。いったいどんな症状を思い描けばよいのか。

●徒波新●（群馬県 20 歳）

うかぶくらげただみるだけ
うたたねしたときにみたゆめ

【評】意味は分からずに、ただ映像だけが記憶に残る夢がある。浮遊するクラゲには物語性も何も感じられない夢だったのだろう。しかし、その映像はありありと残り消えない。

●春蜜柑●（群馬県 16 歳）

堤防を歩く風光っていても

【評】「いても」の逆接の言い止しの結び

が、謎めている。風渡りのよい明るい堤防を歩く。「歩く」と「風光る」は順接の親和性があるように感じられる。しかし、ここでは逆接。ここにどんな心のドラマの投影を思い描けばよいのだろうか。

● 彩燈 琴璃 ●（東京都 18 歳）

真昼間に茹で大根が透けていく
また占いは少し当たって

【評】茹でると白から透明になってゆく大根。そのしばしの時間に「また占いは少し当たって」と思っている。「少し」が、占いの本質をうまく言い当てている。当たるというよりは、某かの思いあたりを誘発するのが、占いの言葉であろう。当たっていないところがあっても、当たっているとと思うところに、思いは吸い寄せられて、「少し当たって」感じられている。

● 古倉 風紗 ●（広島県 34 歳）

かなしみはいつも涙になりきれず
海になりたい日の塩むすび

【評】涙を流すまでのかなしみは、希れであろう。しかし、涙を流さないまでのかな

しみは、日常茶飯かもしれない。ある意味でかなしみの本質を言い当てている。「海になりたい日の塩むすび」は、具体的な事象に対するものというよりは、茫洋とした悲しみの気分によるものと言っているのだろう。ゆえこそ日常的な心の有り様でもあるのだろう。

● 小牧 悠人 ●（京都府 22 歳）

お湯が沸くまで猫に顔をうずめる

【評】「猫に顔をうずめる」は、愛猫家の「猫吸い」の場面だろう。コーヒブレイクのためのお湯を沸かす間に猫と遊ぶ。大切な癒やしの時間だ。

● 猪山 鉦一 ●（神奈川県 23 歳）

魚には桜が寄生しています

【評】「桜鯛」のように桜の季節に桜色に発色するさまを、このように表現したとも思えるが、「寄生」の言葉が強い。比喩的な表現ととるよりも、このまま現実を超えた表現と受け止める方が面白いだろう。

● 上原一樹 ● (群馬県 19 歳)

初夏の潮の匂いの町役場

【評】海沿いの町の役場。夏を迎えると、潮の匂いが強くなり、役場まで包み込む。役場は、海岸線近くにはないだろう。すこし離れた高台にあるイメージだ。それゆえに、「初夏の潮の匂い」の強さを感じられる。「町役場」の場面設定が効いている。